

# RadioDays



## ラジオデイズ

声には、  
人の体温があり物語がある

1

January Edition  
2010, vol.32  
Free of charge

月刊「ラジオデイズ」1月号 (通巻第32号)  
2009年12月28日発行  
[発行人] 赤塚祐一郎  
[編集人] 大森美知子  
[発行所] 株式会社ラジオカフェ  
東京都新宿区新宿1-6-5 シガラキビル6F  
Email: info@radiodays.jp FAX: 03-5356-8281  
http://www.radiodays.jp

この人の声が聴きたい◎1月

開高健さん(作家)

## 釣り人は背中 のオンブオバケと闘っている

TBSラジオに残っていた開高さんの声を聴いて、モンゴルにイトウを釣りに行った時の写真を思い出した。かすかに微笑んでいるが、眼差しは何かを哀れんでいた。憐憫の対象は恐らく魚ではなく、それを釣らんとする自身であるようだった。

それは死の前年のポートルートだ。モンゴルは五八歳で亡くなった開高さんの最晩年の釣行である。イトウはなかなか釣れず、帰国寸前、ポロポロになった釣師に、川の精の贈り物みたいなイトウがもたらされた。テレビ番組では、その時、開高さんは甲高い声で、「イトウだ! イトウだ!」と叫んだ。

僕の勤めていた出版社に電話をかけてくる時、この小説家は、必ず「よれよれのカイコーです!」と名乗った。

学生時代に『輝ける闇』に強く惹かれ、その影響もあってベトナム戦争に関連する本をいくつか編集した。生井英考さんの『ジャングル・クルーズにうってつけの日』、マイケル・ハーの『デイスパッチズ』、ジョン・サックの『M』などだ。開高さんは、ジョン・サックと面識があったようで、わざわざ電話をくださった。よれよれの小説家は、闇達な調子で、ジョンはまじめな男だった、まじめすぎた何を言っているのかちっともわからなかった、でも、やつの本なら応援したい、ゲラが出たら送ってくれ、僕が見てやるからおっしゃった。亡くなったのはその一年後ぐらいだったような気がする。

釣師の心には暗いセンチメントがある。

なすべき仕事をさぼって魚にかまけている後ろめたさ、とにかく釣りたいといういわれなき執念、「ことはまず成就しない」というペシミズムなどがないまぜになって煮込まれているうちに、この道楽の奥底には古代的悲哀のようなものが分泌されてくる。

「ツキの構造」という連載エッセイで、開高さんは、群馬県の丸沼からスタートして、榛名湖、銀山湖、青森八甲田、下北半島、さらに酒田の最上川へ三カ月に至る「釣れない旅」を書き続けた。背中のオンブオバケを振り切ろうとする必死の釣行だ。

最後は小笠原諸島のやや手前にある婦岩岩ここで見事、巨大なオキサワラを釣り上げるが、直後に台風接近の報が入り、一目散に逃げ帰る。ツキの神は一瞬、微笑み、重く垂れ込めた悲哀がちぎれ雲みたいに吹き飛ぶ。

最後の一節はこうだ。

「間一髪で私はオンブオバケの急襲をかわした。ついに私は影に勝ったのだ。しゃにむに、どうにかこうにか、「ツキ」を呼びかえした。辛勝だが敗北ではなかった。戸口の敷居のうえにたつて戦ったのだ。変貌は完了した。」

突然、闇が輝き、生の実感が湧き上がってくる。ことがある。

そんな文章を僕はあの饒舌な作家からいくつも教えてもらったような気がする。

(ラジオデイズ・プロデューサー 菊地史彦)



ラジオデイズは、文芸・対話・話芸を三本の柱に、声のもつ魅力に特化した音声コンテンツを制作し、ダウンロード販売するWebサイトです。飄逸で含蓄のある随筆、瑞々しい感性の横溢する詩歌や小説の朗読、個性的な対話者たちの真摯な言葉の応酬から生まれる知的交歓、粹と人情の落語や講談などなど、大人のお楽しみにたえる魅力的なコンテンツが満載です。

ただいま入会随時受付中!

会員(年会費無料)になられると、期間限定の無料コンテンツがお楽しみいただけます。サイトでは、声の魅力を凝縮したコンテンツのすべてが試聴できるほか、演者のプロフィールやコラムなど読み応えも十分です。どうぞお立ち寄りをお願いします!

<http://www.radiodays.jp>

### 〈対話・放談〉

人気メルマガでおなじみ、田中宇氏の国際ニュース解説「世界はこう読め!」I・II、作家・瀧川鯉昇師匠の癒し系連続トーク「鯉昇の屋敷まくら」、ムッシュかまやつさんや、最後のインタビュアーになった故加藤和彦さんなど、ミュージシャンにお話を伺う「Music Talk」、姜尚中さん、福岡伸一さんなど知的なゲスト満載のラジオ番組の番外編「ラジオ街ブラス」が好評。さらに、気鋭の映画評論家が現代を表象する人気漫画家たちと濃厚な知的交歓をする「町山智浩の、漫画師に訊け!」が毎月配信されます。脳科学者の茂木健一郎さんが美術評論家の橋本麻里さんと歩きながら「ニューロンの発火のごとく言葉」を紡ぐシリーズも待機中です。

### 〈文芸〉

作家の関川夏央さん、小沢昭一さん、詩人の清水哲男さんなど多彩な解説者を迎えた「声のエッセイ」コレクションが評判。また、「声の詩集」シリーズでは、女優鳥丸せつこさん朗読、詩人正津勉さんナビゲートの「詩人の愛」I・IIをお届け中。女優有馬稲子さん朗読の「水仙」や、さらに本邦初となる落語家・入船亭扇辰師、柳家三三師朗読による江戸弁で聴く「ゴゴリ」「外套」「鼻」も発売中。そして、太宰治生誕百年のいま、松平定知さん、山根基世さんなど熟練アナウンサー朗読の「人間失格」「斜陽」他も聴きこえたえ十分です。

### 〈話芸〉

ラジオデイズ収録の新鮮なオリジナル音源約三百本をお届け中。時代に磨かれた古典を自家楽館中に現代に演じさせる断家たち。そして、時代の流がれから湧き出た、かつて語られたことのない新作に鏗る断家たち。ライブ音源だけに一期一会の断に出会えます。また、すっきりと背筋の伸びた聴きこえたえのある講談は第二、第四金曜日に配信しています。まずは試聴ボタンを

●オリパスモビープレゼント  
**「鉄博寄席」** (第1回)

【日時】1月9日④午後2時開演(午後1時30分開場)  
 【場所】鉄博ホール(鉄道博物館内大宮駅より二一シャトル乗換え)  
 二〇一〇年新春、鉄道博物館で寄席がスタート！  
 鉄道ファンはもちろん、鉄道ファンでなくとも爆笑の初席です。開口一番の古今亭駒次さん、トリの柳家小糸ん師匠は、鉄道に材をとった爆笑新作落語を披露します。マニアックな展開に、思わず「や、やがて腹を抱えることになるでしょう。三遊亭遊雀師匠は、乗り物に因んだ本格派の古典落語で「機嫌をうかがいます。明るく新年の幕開けにふさわしく、鉄道博物館で初笑いをお願いします！」

**柳家小糸ん** やなぎ ことん



柳家小糸ん門下。昭和六十年、真打昇進。独特の落語哲学を持ち、その存在は「新作落語」の分野において必要不可欠な存在。天文分野にも造詣が深く、「科学する落語家」の異名も。プラネタリウム落語会など落語の可能性を探る活動を積極的におこなっている。

**三遊亭遊雀** さんゆうてい ゆうすく



平成一三年、真打昇進。一八年、三遊亭小遊三門となり、独特の浮遊感と彫りの深い演じ手として活躍中。古典ネタを得意とする折り紙つきの実力派。一八年度、国立演芸場主催「花形演芸大賞」金賞を受賞。翌年大賞を受賞。自他ともに認める鉄道ファン。

**古今亭駒次** ここんてい こまじ



古今亭志ん駒門下。平成十九年、二ツ目に昇進。折り目正しくスマートな古典に定評がある。また、鉄道などを題材にしたマニアックな新作も手がけ、その才能は三遊亭円丈にも一目置かれるほど。若手新作落語の会「せめ連麿」のメンバー。

う る さ  
**明烏い話**

連載第34回 本田久作



東京の落語に廓があるように、上方にも廓を舞台にした茶屋噺がある。どちらも遊女が出てくる噺で、『三枚起請』のように大阪の茶屋噺がそのまま江戸に舞台を移して東京で演じられている例もある。だから上方落語を聞いていると、その昔の大坂の廓の様子がよくわかるかといえ、そうでもなかったりする。そこそこ落語に詳しい人なら、昔の吉原のシステムについてはよく知っているだろうが、そういう人でも大坂の廓のことはほとんど知らない。たとえば吉原は江戸で唯一の御上公認で遊女の置ける場所であったことは落語ファンなら誰もが知っている。それ以外の場所が廓ではなく岡場所と呼ばれていたことも常識の範疇に入るだろう。ところが江戸の吉原と同様に大坂にも一ヶ所だけ官許の廓があったのだが、これがどこであったのかを知っている人は意外と少ない。

理由はいくつかあるだろう。まず第一に上方落語の茶屋噺の中で、舞台を大坂唯一の官許の廓である新町に設定している噺が吉原の廓噺ほど多くない。加えて、東京の落語の中の江戸っ子はやたらと吉原へ遊びに行くし行

きたがるが、大坂の人間はさほど新町には固執していない。第二に吉原は今では地名は変わってしまったものの、それでも今なおその昔と同じ種類の商売が行われているというのに、現代の大坂の新町は昔の面影などかけらも残っていない。新町を舞台にした上方落語があったとしても、それを聞く客の方は感情移入しづらいだろう。

とはいえ、そんなことよりも東西の廓に關してはもっと重要なことがある。それは大坂と江戸とは廓のシステムがかなり違っていたということだ。たとえば、東京の吉原では各見世に遊女がいて、客はそこへ行って遊ぶ(例外もあるが、それを言い出すときりがないのでここではその説明は除く)。大坂の新町だと客が座敷に入ると、遊女は別の見世から呼ばれて来る。東京でこういうやり方で座敷にやって来るのは、花魁ではなく芸者である。戦後、大阪の廓で接待された東京の噺家は、芸者が来たこと誤解して喜んだという。本職ですら大坂の廓のシステムを知っていなかったのである。

何故こんな風になってしまったのか。それは上方落語よりも東京の落語の方が知られているから、ではない。落語ファンですら大坂の廓のシステムをほとんど知らないのは、上方の噺家の中に一人の志ん生がいなかったからだ。

実は上方の噺家も時々枕などで大坂の廓のシステムについて説明したりすることもあったところが、ただの説明など客は聞きはしなないし、聞いたとしてもすぐに忘れてしまう。私たちが吉原のシステムを知っているのは、志ん生が「二階に上がるとここを引き付けてえませんが、引き付けと言っても目を回すところじゃない。で、ここに出てくるのがおぼさ

んで、おぼさんと言っても身より頼りじやない。別名遣手と言いますが、遣手てえからくれるのかと思つたら、貰いたがってしようがない」などとくすぐりを交えながら説明してくれたからだ。聞いていて楽しい話なら、自然と覚えてしまう。だからもしも志ん生がいなければ、私たちはおそらく今ほど吉原について知らなかったはずだ。志ん生はそういう形でも今なお落語に貢献しているのである。

●ほんた、まうさく

一九六〇年大阪府生、落語作家。二〇一〇年の「仏の遊」が国立演芸場日本舞集佳作受賞以来、落語、漫才など新作日本舞集の賞を毎年総ナメの業界巨匠の新進作家。主左賞賞作「手まづ」(国立演芸場日本舞集優秀作)、「備の葬式」(按摩の夢)、「幽霊茶屋」(いずれも落語協会優秀賞)など

**私の讀大ばなし 参拾貳**  
 昔昔亭桃太郎

き 『たらちね』

昭和四十一年に入門のとき、師匠の柳昇に教わり、初高座にかけた思い出の噺。あがってしまい、薬局で精神安定剤を買って飲んで高座に臨んだものの、途中で薬が切れて、後半は滅茶苦茶になってしまいました。

式 『火事息子』

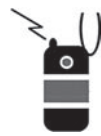
爆笑落語家・桃太郎と言われて、ずっと新作をやってきたのですが、応援してくださっている高田文夫さんの「桃ちゃん、古典やりなよ」のひとことで、六年前この噺をやってみたら評判がよかったです。これがきっかけで古典も意欲的にやるようになりました。

参 『居残り佐平次』

先々代の雷門助六が大坂からもってきた噺を改作して演じています。いまでは演じるのはほぼ私だけで、初めて聞く珍しい噺にみなさん面白がってくれます。人が演れない噺を工夫しながら演るのは張り合があります。

# 行こみちが 行けば

女流二ツ目の修行日乗③



柳亭こみち

この原稿を書いている現在、十二月。大掃除の季節だ。師匠宅の壁や床から家具、家電。日頃の感謝を表すべく、くまなく何日もかけて行う。ジャージ着用で気合い十分だ。

しかし気合いとは何故に空回りするのだろうか。ペランダを掃除すればデッキブラシが真っ二つに折れる。洗濯機を磨いていたら、ホースが外れ凄まじい勢いで水が飛散。自分も洗面所も廊下も水びたしに。前座時代、電気掃除機に取りかかった時のこと。脚立の最上段に爪先立ちでやっと手が届く、電気の傘。外した方がいいが、はめられなくなった。傘はコードでつながって天井からブランブラン。一人ではどうにもできないが、家にいるのは私とハムスターだけ。寄席に行く前に取り付けなければ! 焦るばかりでうまく扱えない、直系セ〇センチの傘。マンシヨンの管理人さんに助けを請うと「そういうサーピスはしていない。清掃のおじさんは「今忙しい」。私より一〇センチほど背の高い清掃のおばさんに頼むと「あら大変! お部屋に行くわ」。師匠の留守に他人を家へ上げていいの、悩む余裕はない。

おばさんの救いの手でやっとこさ元通りに。「あんまり無理して掃除しようとしないう方がいいわよ」と有り難いご忠告までいただく。おっしゃる通り、やっと手がかる高さの電気を磨くには、身長が足らなかつた。外しただけで磨かず終い。背の足りるおばさんに

「ついでにそこ掃除してください」とも言えない。大騒ぎして取りつけたあの電気は、今だから磨いた事のないまま眺め続けている。気合いだけでは大掃除は成功しない。

●りょうい・こみち  
社会人生活を経て、平成15年柳亭燕路入門。18年11月二ツ目昇進。趣味は長門。特技は日本舞踊、吾妻流名取(吾妻香美)。落語協会野球部チームR所属。

## 味な脇役・話芸のきまり文句

連載第32回

# 出世

松井高志



講談・落語に引用される諺・故事成語のたぐいは、ライブで聞いていると、なんだかずいぶんいいこと〓処世の役に立つようなことを言っているような気がするが、それはごく罪のないネタの中に組み込まれているからで、ともすればおかしなお笑いと、もつともらしい金言が組み合わせられている、その対照という落差に面白さがある。だから、これらの引用句だけを取り出して、処世術や成功哲学のようなものを見出そうとしても、実はあまり楽しくはない。

講談というのは往々にして、主人公の立身出世譚であるから、出世に関する諺・金言がストレートに引用される。主人公が一念発起して、さてこれから身を立てようという場面

などでは、

世に出ずばまたこは越さじ 国の山(雲居禪師)  
などという一種悲壮な昔風の決意表明がなされる。今は知らないが、地方出身の上京者には、こんな覚悟が大なり小なりあったのである。

四五十にして聞こえざれば、これまた畏るるに足らざるなり(磯貝十郎左衛門)

などと「論語」を直球どまんなかに引用してくるのも講談ならではの。才能のある者は、「俺はまだ本気出してねえし」などと一言わず、既に若いうちに名を成しているもの、というのである。

そして艱難辛苦の末に主人公が名を成せば、志あれば事遂に成る(粟崎道晴)

などと結論する。

一方、落語は立身出世を実にクールに扱っている。主人公が立身出世しました、めでたしめでたしで素直に噺が終わったりもしないし、なかには、

人間は出世をするような災難には出会いたくない(三方一両損)

という一種の名言さえ生み出している場合もある。これ、斜に構えているわけでも笑いを取ろうというのでもなく、見方によっては講談のそれより相当にまっとうな出世観であるように思う。

●まい・たかし

一九六〇年愛知県生。月刊誌編集者を経てフリーライター。著書に「人生に効く! 話芸のきまり文句」(平凡社新書)、「ナンダク」(難読漢字自習帳)(バジリコ)「江戸に学ぶビジネスの極意」(アンズペクト)など。話芸「きまり文句」サイトは <http://vageidom.cocolog-nifty.com/>

microSD版  
**ラジオデイズギャラリー**

「語り」を持ち歩こう!  
いま旬の噺家の息づかいもリアルな必聴落語の数々、現代がよくわかるエッジの立った国際時事解説がこんな小さなカードにみっちり満載です。

<p>●落語永久保存30選 合計収録時間:約20時間09分 ¥9,900.-</p>	<p>●爆笑演芸会33選 合計収録時間:約18時間24分 ¥9,900.-</p>
<p>●特選現代落語35選 合計収録時間:約14時間11分 ¥8,800.-</p>	<p>●田中宇の「世界はこう読め!」 合計収録時間:約11時間27分 ¥3,900.-</p>

# 発売中

たとえば...

ラジオデイズギャラリー入り microSDカード

microSDカードが使える携帯音楽プレーヤーでお手軽に楽しめます。パソコンで聴くには、カードリーダーをご使用ください。※携帯電話では再生できません。

お問い合わせ : (株)ラジオカフェ  
<http://www.radiodays.jp/>  
メール: [info@radiodays.jp](mailto:info@radiodays.jp) Tel.03-3341-1230

オリンパスモビープレゼンツ

「フジテレビ目玉名人会」(第7回)

【会場】フジテレビ・マルチシアター(会場)  
【本声銭】2800円(前売2500円)  
【時間】午後4時開演(午後3時30分開始)

●2月27日(土)

古今亭菊之丞・ゲスト二遊亭小田歌  
\*トークあり。司会・塚越孝十女子アナ

第32回オリンパスモビー寄席

橋家文左衛門独演会

【会場】お江戸日本橋  
【本声銭】2800円(前売2500円)  
【時間】午後6時45分開演(午後6時15分開場)

●3月16日(火)

橋家文左衛門・ゲスト 鈴々舎わか馬

※予約申込受付中。ラジオデイズURL <http://radiodays.jp> もしくは、予約受付専用電話・011-3334-1113より、先着順です。

ラジオの街で逢いましょう

ラジオデイズでは、声と語りの魅力を求めて、深夜のラジオ番組も制作・放送しています。  
お相手は、ラジオデイズプロデューサーの平川克美、菊地史彦、伊藤博、大森美知子が務めます。これまでの放送分は、ラジオデイズサイトにストリーミング放送中。さらに、ポッドキャストでも配信しています。どうぞ真夜中の語らいに耳を傾けてみてください。

<http://www.radiodays.jp>  
インターFM 毎週日曜日の深夜23時から23時半まで。

今後の放送予定(深夜のお客様)

- 1月3日 昔昔亭桃太郎(落語家)
- 10日 和田秀樹(精神科医)
- 17日 宮嶋茂樹(カヌーマン)
- 24日 佐山一郎(コラムニスト)
- 31日 香山リカ(精神科医)

師走の落語会

三遊亭白鳥独演会

二〇〇九年の最後を飾るオリンパスモビー寄席(十二月十五日)は、怒濤の三遊亭白鳥独演会。お江戸日本橋亭にはディーブな新作落語ファンが大集合。開口一番! いつもカワユイ春風亭ぼっぼさんの「ん廻し」でご機嫌を伺い、長屋の若い衆もみんなカワユイく大変身です。

さて初っぱなから登場は白鳥師匠。ネタはラジオデイズが初配信となる「ピンピンマン」。新興のドラッグストアに客を奪われた老夫婦が営む薬局。起死回生? 少子化対策に役立てるべく売れ残りの薬を調査してピンピンマンを売り出すが……。現代と過去とをつなぐラブ罗曼人情噺の誕生です。

続いて本日のゲストは円丈門下、白鳥師匠の弟子に当たる三遊亭ぬう生さんが苦み走って登場です。嫁の来てがない奥深い村の青年が、新宿だが場末のホストクラブにやってくる。嫁っこ集めと村起こしのため七人の侍よろしくホストを助っ人にしようとするのだが……。ネタは「ホストが来た村」。

ぬう生の名はかつて円丈師匠が名乗っていた出世名跡。新作の腕前は確かです。

仲入り後トリはもちりん白鳥師匠。ネタは「死神」とい、「Xmas版・死神」とな?

時代を現代に置き換えて、ボンボンの医者が主人公。わけあって病院をリストラになり自殺をしようとした男。ご存知死神に助けられ……。白鳥流はただでは終わらない。壮大な神話人類史の世界に聴衆を誘ってくれるのだ。「死神」はイタリヤ歌劇「靴直しクリスピーノ」(邦訳「クリスピーノと死神」)から、

かの落語中興の祖、三遊亭圓朝が翻案して古典落語の名作となったもの。三遊派の名にかけて白鳥師匠が爆笑にのたうつ現代落語ファンに問う、大圓朝を超えるか?

(ラジオデイズ寺和尚)



三遊亭円丈

本田久作



高橋源一郎

小池昌代



養老孟司

内田樹



ぬう生

白鳥師匠

「声」と「語り」をダウンロード!

今が旬の音声コンテンツ満載  
<http://www.radiodays.jp>

今最もブッキング困難な役者を揃えた特別対談。絶妙な話芸と目から鱗の文化対談をお届けします。

●戦後落語論

新作落語の旗手、そして教祖的存在である三遊亭円丈に、新進の落語作家本田久作がからむ。落語ファン待望の新作落語黎明期の真相話が炸裂。

●戦後詩人論

戦後作家の中心的存在であり鋭利な批評家でもある高橋源一郎が、生粋の詩人にして川端康成賞の小説家でもある小池昌代と現代詩について話し合う。

●戦後マンガ家論

脳生理学者であり京都漫画ミュージアム館長でもある養老孟司と小林秀雄賞受賞の現代思想家内田樹。マンガに一言あるこのふたりが存分に語り合う。

そのほか、面白くて物凄、朗読や落語がいっぱい。ラジオデイズサイトによるこそ!

※ご購入や無料ダウンロードには会員登録(無料)が必要です。

「オリンパスモビー寄席」携帯用特別コンテンツ

モビー寄席特別コンテンツでは、モビー寄席やラジオデイズ落語会にご出演いただいた演者さんの情報や音源、最新のラジオデイズイベント情報が携帯電話からお楽しみいただけます。



p@mobee.jp

バーコードで簡単アクセス!

左のQRコードを携帯のカメラで読み取り、メールを立ち上げて撮影写真を添付し送信。  
※ドメイン指定受信の設定をされている方は、mobee.jpを追加してください。

月刊ラジオデイズ各号の1ページ目『この人の声が聴きたい』の丸抜き写真、見開きページの落語家さんのプロフィール写真を撮影、メールに添付して送信すると、アクセス先URLが記載されたメールが返信されてきます。



Mobee (モビー) とは?

オリンパス(株)とホスティング・アンド・セキュリティ・インクスの共同開発による、携帯サイト作成ツールと先進の画像認識技術によるサイトアクセス方法を月あたり263円~という低価格でご利用いただける携帯サイト作成サービスです。

個人の方から法人のお客様まで自分専用の携帯サイトを簡単に開設することができます。用途に応じて、クーポン作成やメルマガ配信などのプランもご用意しました。お申し込みは、PCから<http://pdh.mobee.jp>にアクセス!

ラジオデイズの窓から

きれいに掃き清められた遊歩道を晴れやかな笑顔の人々が行き交います。新しい年の始まりは冷たい大気を深呼吸して、初めてのことに取り組んでみようかなという気分になります。炬燵のなかでゆっくり落語を聴いて初笑いするもよし、歴史を学んだり、文学作品に触れたり、知的なダイアログに耳をそばだてたり……。これまでになかった楽しみにラジオデイズで出会ってください。

